

2年2組

 わたしとニコのくらし
 ～迎えたい ヤギのニコ～


生きものを育てたい

新年度が始まって1週間。早速中核活動に向けて動き出しました。「動物を飼いたい」という声があり、その思いは日に日に膨らんでいきました。始業式でのYさんの発表からそれが始まっていきました。あさがおやカエルとのかかわりから生まれてきた「2年生で生きものを育ててみたい」、「きっと1年生で学んだ工夫が役に立つと思うから」、「いのちは、責任が重いけれど、ぼくたちならアイデアを使って育てられる」というYさんの言葉についてどう思うか問うと、勢いよく話し始めた子どもたち。「飼ってみたい」という思いや様々な生きものの名が挙がります。「小屋もつくらないだし、そうじもエサやりもある」、「初めてで大変なことがたくさん」と、飼育の大変さについても語られましたが、「それが飼うってことだよ」と続き、大変なことも受け入れ、それも含めてわくわくしているように見えました。

そんな中、Mさんは、「そもそもかいたくないので、かいません」とカードに書いていました。Tさんも飼いたくないと書き、そのわけについて、「生きものがしぬところと、したいを見たくないから」と書いていました。飼いたいという思いがあるのと同じように、飼いたくないという思いがあるのも当然のことです。ありのままの思いを、こうやって表出できることがすごいと思います。

子どもたちの生きものを飼いたい思いとそのわけ、そして飼いたくないという思いを受け、次の時間は、わたしの思いと考えを子どもたちに伝えました。私も生きものを飼いたいということ、しかし、それは簡単には実現しないこと、生きものをどこから連れてくるのか、協力してくれる人が必要であり、そういう人が本当にいるのか、その生きものがずっと生きていける場があるのか、みんなの思いに加えてそういったことも踏まえて何を飼おうかわたしなりに考えたこと、そして、希望を見つけたことを伝えました。その希望というのが、須坂市豊丘でタナカファームを経営しており、ヤギ飼育もしている田中哲（さとし）さんです。田中さんに事情をお話したところ全面的に協力してくださるとのことでした。わたしが田中さんとヤギたちと会って感じた魅力を伝え、田中さんに協力してもらって2の2でヤギを飼うことを子どもたちに提案しました。提案の途中から、「完全にヤギ!」、「田中さん、ありがとう」と声を上げていた子どもたち。飼いたくないという思いを抱いていたMさんも、飼いたい人として挙手していました。Tさんは、「またパソコンをつかおうとしたけど、こんかいはつかわなくてよさそう。もしも、きけないときは、パソコンでしらべる。たとえば、どういう小屋がいいか」と書いていて、田中さんを頼りにし、自分でも調べようと考えていました。



飼いたくないと考えていた二人は、本当に育てられるのかと不安を感じていたのかもしれませんが、それは、育てていく先にある困難を見据えていたからこそだと思えます。田中さんという頼れる方の存在が見通しとなり、挑戦の一步を仲間と踏み出したくなったのだと、わたしは考えました。



立ち止まって

タナカファーム見学当日。ヤギを譲ってくださるという田中さんの営むタナカファームへ行き、田中さんに話を聞いたり、ヤギたちと触れ合ったりしてくる日ですが、この日を迎えるまでも学びがありました。わたしが子どもたちから学ばせてもらったのは、立ち止まる子どもの声や思いと一緒に立ち止まって考えることで、よりクリアに見えてくるものがあるということです。

タナカファームへ行きたいという意識がまず高まったのは、わたしが田中さんとタナカファームを紹介した時でした。「先生、ずるい!」、「みんなで行きたい!」と、画面越しで見るその場所に、実際に行ってみたくてという子どもたち。直感的な言葉であったように思います。次は、どんなヤギを飼うのかが分からないと先に進めないということで、飼うヤギを決めたいという話になった時でした。「タナカファームへ行って、ヤギたちを見て、みんなで飼うヤギを決めよう」と、今度は理由が言葉に表れた「行きたい」でした。そして再度、「やっぱり行きたい」となったのが、田中さんの思いを考えた時でした。「田中さんの大切にしているヤギをわたしたちが選んでいいのかな」、「田中さんを困らせたり我慢させたりするのはいやだ」、「田中さんの本当の思いが知りたい」、「やっぱり行けば分かるよ」と、自分たちが飼えるヤギについてまず田中さんの考えを聞きたいという理由から、改め

てタナカファームへ行きたいという意識が高まりました。わたしも、これでタナカファームへと考えていましたが、そこで立ち止まったのがYさんでした。

Yさんは、「行きたくない。選びに行くなら行った方がいいけど、そうじゃないなら行かなくてもいいと思う」、「心の中で、『ただ行きたい』ってだけなら行かない方がいいと思う」、「わたしも行きたい気持ちはあるけど、行くには深い理由が必要なんだよ。深い理由がないから、行けない」と語りました。

Yさんは、きっと飼うヤギを自分たちで決めたいと思っていて、そのためにタナカファームへ行きたいと考えていたのだと思います。それなので、まず田中さんの思いを聞くとなった時にYさんにとっての行く理由が見いだせなくなったのではないのでしょうか。そして、深い理由という言葉で、タナカファームへ行く明確な理由が一人一人の内にあるのかということも、自分の内にある「行きたい」という思いと葛藤しながら仲間にしたかったのだと思います。Yさんの言葉によって、タナカファームへ行くことについて全員で立ち止まることになりました。もちろん、わたしもです。

その後、深い理由とはなんなのかについて、時間をかけて考えを聴き合いました。すると、わたしたちの大切にしたいことが見えてきました。田中さんの思いを踏みつけたくない、大切にしたいということ。ヤギとこの手で触れ合いたい、ヤギを感じたいということ。これからヤギを迎えるための見通しをもちたいということ（どんな準備が必要なのか）。それぞれの考える深い理由について語る仲間の言葉を聴いたYさんは、「わたしも本当は行きたい。気持ちよく行きたいんだよ」と話します。そして、Sさんが「楽しい気持ちで行ければ、気持ちよく帰ってこれるんじゃない」と言うと、はっとした表情で、「そうか、目標があればいいんだ。目標が深い理由になる」と笑顔で話したYさん。



仲間の言葉によって、Yさんの内の「本当は行きたい」という思いが刺激されると共に、そこに理由が肉づけされていったのではないかと思います。そして、タナカファームへ行くということを前向きに捉えた時に、Yさんの求めた深い理由というものが「目標」という言葉になって表現されたように見えました。よく聞く目標という言葉が、Yさんにとってより意味をもつものになったのではないかと思います。そしてそれは、学級の仲間にとっても、わたしにとっても同じであるように思えます。Yさんは、見いだした目標について次のように書いていました。

行くときのもくひょうはやぎのことをしらべてくることだから、ちゃんともくひょうをやってかえってこれるそれが、やっと見つかったふかいりゆうというものだとおもいます。まず、田中さんの気持ちをしるのがたいせつだと、おもいます。だから、まだやることは、たくさんのこっているとおもいます、やぎのしゅるいやとくちょうをしてノートにかいてくること、それで、みんながノートにかいてきたことで、ヤギのことをしれば、みんなできいたからこそ、2年2組でかう、たいせつなヤギだとおもいます。それでこそ、いのちをささえるたいせつなせきなんだとおもいます。

立ち止まることで、新たに見えてくるものがある。これからも、立ち止まることがあると思いますが、そこに意味があると信じて共に考えていける自分でありたいと思います。

自分の内に目を向けていく

タナカファームへ行ってきました。わたしたちのために力をかしてくださる田中哲さんと奥様の久子さんと出会い、タナカファームにくらすヤギたちと直接触れ合うことができました。田中さんからは、ヤギはとてもやさしい動物であること、ヤギの様子をよく見たりヤギの目を見て話しかけたりしてヤギの気持ちを考えながら育てているということ、わたしたちに合ったわたしたちが飼えるヤギを探してくださっているということ、それはタナカファームにいる大人のヤギたちではなく今年生まれた子ヤギがよく、その子と一緒に育ててほしいということ、みんなで協力して育てる中で学んでほしいということ等、思いをお話いただきました。ヤギたちとの触れ合いでは、エサをあげたり触ったり抱っこしたりと、ヤギを肌で感じることができました。「かわいい」、「あったかい」、「ヤギが好きになった」、「もっと飼いたくなった」と話す子どもたち。「今まで外に出た中で一番楽しかった」と田中さんに伝えた人もいました。「物怖じしない姿が遅く見えました」と田中さんからお言葉をいただきました。



Kさんは、「ヤギを飼いたくない」という思いをもち、タナカファームへ行くことに前向きになれない様子がありましたが、タナカファームでヤギたちを目の前にすると、すぐにエサやり（その場でとった草）を始めました。最初はヤギの口に当たらないように手をひっこめていましたが、その手はだんだんとヤギの方へ向かい、ついには両手でヤギのことをなでていました。「飼いたくない人になつくんだ」と笑顔で語りながら、誰よりもヤギの近くでお弁当を食べるKさんの姿がありました。その日のKさんの日記には、次のようにつぶられていました。

…ぼくはヤギをさわりたいだけなので、かいたいとほそんなにおもいませんでした。でも、じつはぼくはヤギがさいしょはきらいだったので、かいたくないとかみにかきました。けど、いまのほうがすきです。…

Kさんは、ヤギを目の前にし、友だちがヤギに積極的にしかかわる姿も見ながら、「ヤギにかかわりたい」という思いを高めたのだと思います。エサを差し出す自分に対して食べることで応えるヤギとのやりとりを通して、ヤギへの警戒心がやわらぎ、ヤギにより近づきたいと願っていったように見えました。そして、ヤギを触れたこと、なでられたことから、自分を受け入れるヤギを感じ、ヤギとの距離を縮められた自分を喜んだのではないのでしょうか。ヤギとの対話で感じた喜びによって、Kさんもヤギを受け入れたのだと思います。Kさんの姿から、ほんものを肌で感じることは、わたしたちの心に直接的に大きな影響を及ぼすこと、それを言葉にすることで自分の変化を感じることにつながるといえるのではないかと学ばせてもらいました。改めて、体験の大切さを感じました。



翌日、Kさんにヤギを飼うことへの思いを聞くと、Kさんは、「たまにがいいんだよ。ちょっと会うくらいがちょうどよくて。毎日会うのは、ちょっと…」と話しました。そして、本当にヤギを飼うかどうかを考えていった授業の中では、「飼いたくない」と表現していました。しかし、その理由は本人にも分からないとのことでした。このKさんの「飼いたくない」という思いについて、Iさんは、「自分で判断していて、いいと思う」と書きました。それを学級で共有すると、「飼いたくないって気持ちがあってもいいと思う」、「わたしも少しある。死んじゃうのがこわいから」、「初めて飼った生き物のオタマジャクシが死んじゃって、とても悲しかった。もうこんな思いはしたくないって思った」等と語られました。また、授業を重ねる中で、「飼いたくないって人を飼いたって無理に思わせることはよくない。まずチャレンジしてみて、飼いたい人でお世話して、でもそれは見てほしい。見ているうちにやってみたくなるかもしれない。だから、飼いたくないっていい思いがあってもいいと思う」、「飼っていくうちに、みんなの飼いたいになればいい。そうやって一つになって行って、最後までみんなでやりきりたい」、「目標をもってチャレンジするってことが大事。だから、みんな、育ててみない?」、「ぼくは早く飼いたい。でも、みんな自分の道は自分で決めた方がいい」、「田中さんのためにも、飼って学びたい」ということも語られていきました。Kさんは、そう話す仲間の方に体を向けて話を聴いていました。

そんな中、田中さんからヤギが見つかったという報告が入ります。ヤギの映像と共にそのことを子どもたちに伝え、「かわいい!」、「早く飼いたい!」、「田中さん、ありがとう」といった声と共に教室が湧きました。「見たら自信がついた」、「きっと飼いたくない人も飼える」、「大変なこともあるかもしれないけれど、今はがんばらなきゃいけない」、「わたしのチャンスをなくしたくない」、「こわさを知りながら、勇気もちながら、みんなでかいたい。わたしたちには、飼う資格をつくれるチャンスがある」そんな言葉がその時のノートにつづられました。それを共有した日。一歩踏み出そうとする思いの高まり、仲間の言葉に共感するかたちで、2組でヤギを飼うということが決まりました。

Kさんもクラスでヤギを飼うことを受け入れ、授業後に思いをつづった紙を持ってきました。

かいたいきもちが、四九パー。かいたくないきもちが、五十パーで、かいたくないきもちの一パーがかいたいきもちがうつればいいのに、かいたくないきもちがそんなにねにもってるのがじぶんもわかりました。一生かいたくないきもちなのかなと思いました。つぎは、かいたいきもちにどうやって、なるのかを考えたいと思いました。

好きになったヤギ。でも、飼うとなるとそこにためらいを感じていたKさん。その理由を自分でも分からずだったKさん。しかし、そんな思いを仲間へ否定されず受け入れられていったこと、Kさんにとって安心したことであり、仲間の言葉により耳を傾け、目と心に向けることにつながったのではないかと考えています。これまで、飼いたくない理由が分からないと言っていたKさんですが、自分の内に目を向ける姿が表れているように思います。仲間へ受け入れられること、仲間の話を受け取ること、飼いたいという自分とは違った立場の考えを許容していったことを通して、自分の内に目を向けていったということが言えるのかもしれませんが。そして、Kさんのつづった、「かいたいきもちにどうやって、なるのかを考えたい」ということが、自分の内に目を向けることで見えてきた自己課題と言える気がします。これを自分で据えたKさん。きっと、これから出あい、共にくらすヤギとのかかわりの中で、また、それを共にする仲間とのかかわりの中で、Kさんはより自分を見つめ、感じていく時があるのだと信じています。ヤギとのかかわり、仲間とのかかわり、育てていくKさんの姿から学ばせてもらいました。

『ニコ』との出あい

ヤギを飼うことを決めたわたしたちの元に、そのヤギがやって来ました。わたしたちと共に育ていけるようなヤギを探し出し、元親さんから譲り受けてきてくださった田中さんのさらなるご厚意によって、ヤギとの対面が叶いました。



ヤギは、石川県珠洲市でタイニーズファームを営む大野隆志（たかし）さんの元で生まれた小ヤギ。大野さんは、田中さんからのお話を受け、「小学校なら安心」とヤギを譲ってくださったとのこと。後日、「かわいし、できれば飼いたい。でも、一人での世話で数を増やすのは難しい。ちゃんと飼ってくれるところをお願いしたかった。みんなに愛されるようになってほしい」とお話を伺うことができました。大野さんの元から田中さんの元へ。そして、わたしたちの元へとヤギがやってきました。

「来た！来たよ！」と、田中さんの軽トラックに乗ってきたヤギを見て、大興奮の子どもたち。「めっちゃ小さい！」と、想像との違いを口にしながら、「すごいかわいい」と、喜んでいました。トラックから降りたヤギを囲み、じっくり見たり、「目がきれい」と声をかけたり、そうっとなでたり、草や落ち葉を近づけてみたりして、あいたかったヤギにかかわり、感じようとする子どもたち。ヤギを驚かせないように、友だちもかかわれるようにと、ヤギと仲間への心配りも感じられました。抱っこに挑戦したり、散歩（走り出すヤギに必死について行く）をしたり、田中さんにヤギのことを聞いたり、ヤギと田中さんとの時間をたっぷりと楽しみました。

どうだったかを子どもたちに聞くと、「小さくて、かわいくて、うれしかった」、「離れたくないと思って、お別れの時泣いた」、「抱っこした時、少しこわかった。飼ってこわさをなくしたい。早くあいたい」、「飼えるか心配だったけど、みんなの賛成もあったおかげで飼えるって思った」、「目標への一步を踏み出せた」、「飼いたい！って決心できた」、「早く迎えたい！」、「名前を決めて、早く名前で呼びたい」、「小屋をがんばる！」、「蹄の間のそうじもした方がいって分かった」、「歌もつくりたい」と、ヤギを飼うことへの思いをより高めた言葉が勢いよく語られました。ヤギとの出あいが、わたしたちの新たなくらしをつくる大きなエネルギーになったように思います。

その後、早く名前で呼びたいという願いから、ヤギの名前を考えました。「2組の仲間。親元のお二人の思い。ニコニコ笑顔。虹のように生き生き光ってほしい。健康で元気で長生きでちゃんと生きてほしい。赤ちゃんを生んでほしい。心あたたかく、心やさしく、わたしたちの心とつながる。仲良く一緒に走りたい。わたしたちの中心」と、たくさんの願いをこめて、ヤギの名前を、『ニコ』と名付けました。

「早くニコに会いたい」

ニコの小屋づくりを進め、2本の柱を立てた小屋づくりの初日から3週間。小屋がかなり形になってきました。小屋づくりをスタートした日、どんなことをする必要はあるのかはおおまかに確認しましたが、誰が何をするのかといった明確な担当決めやグループづくりはとくに行わず活動を始めました。すると子どもたちは、穴を掘る人、草取りをする人、石を集める人、柱を運んだりおさえたりする人、さらにその中でも細かな分担をし、それぞれに自分の活動を決めて動いていきました。その決め方は、自分のやりたいことは何か、道具はあるか、友だちは何をしているか、どこに人手が必要か、何を頼まれるか、次に必要になりそうなことは何か等、自分と周囲とを調整しながら判断を繰り返していたように見え、それがすごいなと思いました。

その後も、小屋づくりの時間に何をするのかは、その日その時のその子の決定に委ね、活動を進めています。現在は、壁づくり、柵づくり、ドアづくり、スロープづくり、穴埋め、エサや食べてはいけないものの調査、小屋のつくりの確かめ等をしています。その中で、自分の願いや問い、どう実現したり解決したりするかの思考、道具の扱いの体での分かり、新たな事実の発見と驚き、友だちや大人のすごさ、人と協力するよさ等、子どもたちは、たくさんのことを感じたり、考えたりしているのではないかと思います。それらはそれぞれに違うと思いますが、根底は、「ニコ」でつながっているように感じます。

「早くニコに入りたい」

ニコの小屋が、とうとう完成しました（一旦）。一人ひとり、自分で考えて、自分で決めて、ニコを迎えるために動いてきました。木材を提供してくださった木商さん、安全のためにお手伝いしてくださった家の方たちと、小屋づくりでもたくさんの人に助けられました。こんな立派な小屋ができると思っていませんでした。きっとニコも、喜んでくれるはず。

最後のくぎを打っていたYさん、Aさん、Yくんは、「早くニコに入りたい」と話しながら、かなづちに力をこめていました。夏休み明け、いよいよニコを迎えられそうです。

